豊かに生きる
誌上セミナー

HUMAN HUMAN

▶スポーツボランティアのススメ②

前回391号では、ボランティアの定義と、そこから派生する「スポーツボランティアの魅力=楽しさ」について。
今回の392号では、東京2020大会のボランティア概要についてお話を伺いました。

公益財団法人笹川スポーツ財団特別研究員
東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ボランティア検討委員
西川千春 氏

Profile
慶應義塾大学法学部法律学科卒業。米国アリゾナ州立大学サンダーバード国際経営大学院国際経営学修士修了(MBA)。1990年に日本精工(NSK)駐在員として渡英。2005年に海外事業をサポートする経営コンサルタントとして独立・起業。2012年ロンドン五輪に言語サービスボランティアとして参加したのをきっかけに、2014年ソチ大会、2016年リオ大会にもボランティア参加。経験を基にボランティアの楽しさややりがい、さらには日本社会への提言をテーマに政府、自治体、大学、関係団体、企業への講演・アドバイザリー活動を積極的に展開。著書に「東京オリンピックのボランティアになりたい人が読む本」(イカロス出版)。

今大会で活躍する 8万人のボランティア

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会(以下・東京2020大会)の公式ボランティアには下限の18歳から80代まで20万人以上の応募があり、関心の高さをうかがわせました。このうちの8万人がボランティアとして活動することになっています。ボランティアたちはどのような場面でどう活動するのでしょうか。東京2020大会組織委員会でボランティア検討委員を務める西川千春さんに、お話を伺いました。

ボランティアが国のイメージを変える

オリンピックは古代ギリシャのオリンピアの祭典を起源とし、1896年にアテネで第1回大会が開催されました。ボランティアの適用は第2次世界大戦後の1948年に行われたロンドン大会あたりから少しずつ始まり、2000年のシドニー大会ではボランティアが楽しそうに活動している姿が報道され注目を集めました。

大ブレイクしたのは、2012年のロンドン大会です。「Games Makers」と呼ばれる7万人のボランティアが大会運営を支え、盛り上げました。私はロンドン大会で初めてボランティアを経験しましたが、運営側もボランティアを良く理解していました。大会のために時間と能力を提供してくれたボランティアに最大限の敬意を表し、アルバイトのように使うのではなく、ゲストとして接してくれていました。そのおかげでボランティアの意欲が高まり、おのずと笑顔に。それが大会の印象に結び付き、堅苦しい国と思われていたイギリスのイメージが一掃されました。東京2020大会の組織委員会もロンドン大会を大きなベンチマークに位置付けていて、「ロンドン大会を追い越すくらいの活躍をしてもらえれば」と期待しています。

9分野で8万人が活動予定

現在、オリンピック・パラリンピックの運営はほとんどマニュアル化され、ボランティアプログラムもその1つに組み込まれています。シドニー大会以降は蓄積されたものを次の大会にレガシーとして受け渡し、それぞれの地域の事情に合わせて変化させて運用しています。

東京2020大会では公式ボランティアを募集するにあたり、役割を次のように9分野に分けました。①案内(観客や大会関係者の案内、チケットチェックや荷物などのセキュリティチェックのサポートなど。空港やホテルなど競技会場以外での大会関係者案内)②競技(競技会場や練習会場内で競技運営をサポート)③移動サポート(大会関係者の会場間移動の際の車両送迎)④アテンド(海外の要人などを接遇。また、外国語での選手コミュニケーションサポート)⑤運営サポート(ボランティアスタッフ対応や、大会関係者へのIDの発行、選手村やメディアセンターにおける物品の貸出しなど)⑥ヘルスケア(急病人の搬送やドーピング検査のサポート)⑦テクノロジー(大会関係者への通信機器の貸出しや回収。競技会場内で競技結果の入力や表示を行う)⑧メディア(国内外のメディア取材の管理や、記者会見をサポート。また、記録用写真、動画の編集や選手村の新聞制作サポート)⑨式典(表彰会場での選手や大会関係者案内、メダルや記念品の運搬など、表彰式の運営をサポート)。ちょっとした手伝いだと思われがちですが、スタッフの多くがボランティアであり、選手や要人の案内、車両の運転、ドーピング検査時の選手誘導など重要な役割を担っているのです。

自国で開催される大会はまたとないチャンス

ある程度の語学力や運転免許などが条件になっている分野もありますが、今回の応募では3つまで希望を出せる方式をとりました。20万人以上から応募があった中で、最も倍率が高かったのは式典。テレビに映るなど目立ちますし、選手を間近に見ることもできますからね。運営側は応募者と面接し、スポーツやスポーツボランティアの経験の有無、語学レベルなどもチェックしながら配置を決定します。なお、希望活動分野を決めかねている人や、どんな分野でも良いのでボランティアとして参加したい人のために、分野の指定なしでも応募できるようにしました。

応募者のうち面接できたのは8万人ほどですが、自国にオリンピックが来て直接ボランティアとして参加できるなんてめったにないチャンスですから、日本だけでなく、海外からの応募や、日本に住む外国人の方の応募も。20代～30代を中心に幅広い層からの応募があり、60代以上のシニア層も多く、最高齢は80代です。皆さん、「ボランティアをやりたい」という熱意にあふれているので、素晴らしい大会になると思います。

協力／公益財団法人笹川スポーツ財団　https://www.ssf.or.jp/